

漢魏洛陽城宮城調査における 新発見とその構造

銭 国 祥[※]

訳 松 本 圭 太

一、漢魏洛陽城址の歴史と調査概況

漢魏洛陽城は中国古代における重要な都城遺跡の一つであり、現在の河南省洛陽市区の東15km、伊洛河盆地中部のやや北に位置する。文献の記載と考古調査によると、漢魏洛陽城遺跡は西周に始まり、東周、後漢、曹魏（三国・魏）、西晋そして北魏において、王都あるいは国都となった。都城の時期幅は総じて600年に達する。それは中国4000年の文明史において、ほぼ七分の一を占めるものであり、中国古代都城における地位は他に類を見ない。周代に建て始められ、唐代初期に至るまで、1600年間使用されたが、その範囲が最大であったのは、北魏時期であり、面積は100km²に近かった。

本城址は、1961年に第一回全国重点文物保护单位となり、62年には中国社会科学院考古研究所が調査隊を派遣、発掘を始めた。以来現在まで50年以上の調査歴があり、多くの重要な考古学的発見がなされた。

そのうち、2000年以前の調査は主に3段階に区分される。第一段階は1960年代である。北魏時期の内城（漢晋時期の大城）の全面調査。各遺跡の重点的発掘が行われ、城の基本構造と内容が明らかにされた。第二段階は1970-80年代初頭。漢晋時期の大城南郊の霊台、明堂、辟雍、太学などの礼制建築遺跡および、北魏内城の永寧寺塔の基壇遺跡が次々と発掘された。第三段階は1980年代半ば-90年代であり、主に北魏時期の内城城壁、外郭城壁、道路、水路、金墉城城壁などについて発掘が行われた。

今世紀以降では、北魏宮城の大規模な調査発掘が開始されている。

二、北魏宮城南部中枢区の新発見

漢魏洛陽城の宮城遺跡の最も早い認識は、20世紀60年代初頭であり、当時は北魏内城の北中部に位置する宮城遺跡が発見された。その規模は広大であり、その凡その範囲と基本構造が認識された。北魏宮城遺跡が初歩的に認定されたのである¹⁾。調査された北魏宮城は、南北長が1398m、東西幅

※ 中国社会科学院考古研究所
中国社会科学院研究生院

1) 中国科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城初步勘查」
『考古』1973年4期。

が660mである。その中部東西に一本の御道が通り、南部は朝殿区、北部は寝殿区であった。宮城の北面は皇室の禁苑である華林園である。

1984年には、宮城中心の宮殿址四面の試掘が行われ、その保存状態と規模が確認された。そして、それが北魏宮城の正殿である太極殿の遺跡であると一応確定された。

1998年から99年に、北魏宮城の東、西、南三面の城壁上に14本のトレンチが設けられ、宮城壁の建築構造、建設時期、使用時期に関する手がかりを得た。とりわけ重要であるのは、宮城南壁西段内側における城門遺構の発見である。これは、以後の大規模発掘によって、北魏宮城の正門である闔閭門であることが確認された²⁾。

2001年から2003年における宮城闔閭門遺跡の発掘によれば、門址は城門楼の基礎、門楼両側の院落、門楼前左右の門闕、門闕と連結する宮城壁などから成っている。城門楼の基壇は東西44.5m、南北24.4m、前後それぞれに3つの慢道あるいは踏道を持つ。基壇上には40の礎石または柱穴があり、城門の柱構造をなしている。さらに両側には2つの墩台と、中間には2つの隔壁とそれらの間の3つの門道遺構を伴う。門前左右の門闕の規模は巨大であり、41.5mの間隔で対称に配置される。各闕台は29m四方であり、闕の平面は一つの母闕帯と2つの子闕から成り、曲尺形の子母闕式である。遺構の分析によると、門の主体部分は魏晉時期に建て始められ、北魏時期に修復、北周時期にも改築されている。この発見は、この城が魏晉時期の宮城形態を確定する上で重要であった。そして2007年には、闔閭門前の銅駝街遺跡が発掘された。

2008年から2011年には、中国社会科学院考古所と奈良国立文化財研究所の共同調査により、北魏宮城中枢南区の発掘が開始された。

2008年にはまず、北魏宮城正面の闔閭門北側の第二宮門が発掘され、これは止車門の遺跡であると推測された³⁾。この門址は闔閭門の真北95mに位置し、門前には東西方向の街路がある。発掘を通じて、この門は門闕を欠くことを除いては、闔閭門遺跡と基本的に同じであり、3つの門道を持つ殿堂式の宮門建築である。門遺構の基壇は東西長約44.5m、南北幅約24mであり、方角は4度である。基壇上には2つの墩台、2つの隔壁と3つの門道があり、基壇の南、北側には3つの車道、そして基壇の東西両端には廊房が附設される。土層によると、この遺構は魏晉時期に始まり、北魏時期や北朝晩期に若干の改築が認められる。

2009年から2010年には、北魏宮城正面の第三宮門について、全面発掘が行われた⁴⁾。この門址は、二号宮門の真北80mに位置し、太極殿の

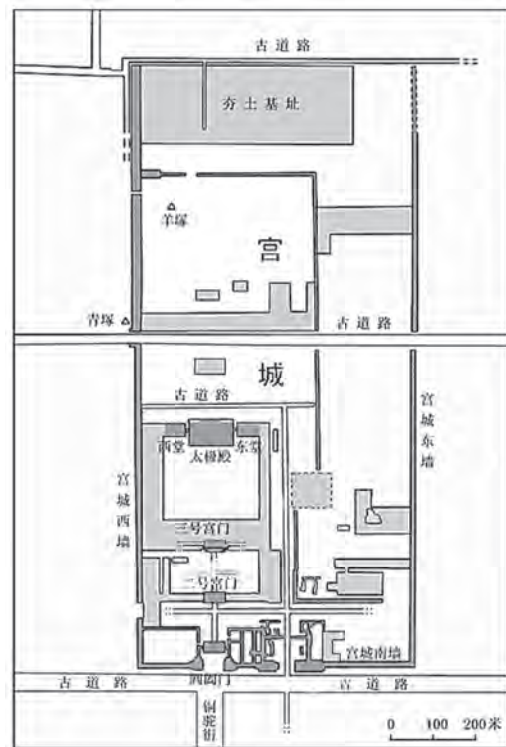


図1 漢魏洛陽城魏宮城における太極殿調査平面図

2) 中国社会科学院考古研究所洛阳漢魏故城隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城闔閭門遺址」『考古』2003年7期。

3) 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所聯合考古隊「河南洛陽市漢魏故城新

發現北魏宮城二号建筑遺址」『考古』2009年第5期。

4) 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所聯合考古隊「河南洛陽市漢魏故城發現北魏宮城三号建筑遺址」『考古』2010年第6期。

真南300mにある、太極殿正面、最奥の障壁建築である。記録によれば、これは宮城の端門遺跡である可能性がある。調査に基づくと、当該門の時期は比較的複雑であり、魏晉から北魏時期に至る門址は南半分のみ存在し、晩期の柱の並びは乱されている。北半分は北朝晩期的大型版築基壇によって破壊されている。層位関係や文献によると、この版築は北周時期に再建された洛陽宮のものであるが、未完成のようである。残存遺構から復元すると、魏晉から北魏にいたる門址の規模と構造は、闔閭門や二号宮門遺跡と類似しており、三門道を持つ殿堂式宮門建築である。この門の基壇両側には、大型廊房の版築基壇が連結しているが、廊房基壇の北半分も北朝晩期の版築基壇によって破壊されている。土層によると、三号宮門と両側の廊房の建築開始年代は、魏晉時期より早く、北魏時期に再建後、使用されている。

2010年から2011年の日中共同調査では、北魏宮城南西隅の五号建築遺跡が発掘された⁵⁾。発掘された西南隅遺跡は、宮城正門である闔閭門から西に140mに位置する。西壁基壇は残幅が2.2-4mで、南壁基壇は残幅が4-5.8mである。発掘によって、魏晉から北魏にいたる宮城西南角の正確な位置が決定し、その建築規模と構造が明らかになった。西南角基壇の平面は、外側と内側に向かって突出し、地下版築基礎の最厚部は3-3.5mである。規模構造は一般の壁に比して強化され、かつ広げられており、角楼を持った明らかな高台建築である。また、西南角の内側には、北朝時期の給排水及び生活施設が発見された。それには、磚造りの大型溜池や水渠数本、さらに数基の大型炉跡などの遺構があった。闔閭門両側の中庭では、数多くの鎧や兵器などが発見され、この区域については、禁衛群の駐屯地との関連が推測される。

上記年度内においては、宮城西南角の宮城西壁の断ち割り調査が行われた⁶⁾。トレンチは宮城西南角から南80m地点に設けられ、東西長は70m、南北幅は4mで、宮城西壁内外を貫くものである。発掘によると、北魏宮城の西壁の東西幅は5.8-7.4m、残厚は2.7-5.1mで、漢晋の水路の廃棄堆積の上に築かれていた。北魏宮城壁の上には、北周時期に再建された宮城西壁が残っていた。さらに重要な発見は、北魏宮城壁内側における、魏晉時期を下らない宮城西壁である。これは、2つの版築遺構であり、幅約8m、厚さ3.6mで、壁の外面には磚や流路の痕跡があった。同時に、魏晉宮城城壁の外側では、漢晋時期の大型水路遺構が1基発見された。それは北から南へ流れるものであり、東辺は魏晉宮城壁外側の流路から4.2mの位置に存在する。さらに、北魏および北周の宮城壁外側では、北魏と北周時期の路面遺構が検出され、その東西幅は11-15mであった。北魏路面下の漢晋水路の廃棄堆積・堆積土からは、北魏時期の磚造りの大型地下水路一基が発見された。魏晉宮城城壁と、宮城外側の漢晋時期大型水路遺構の発見によって、北魏宮城が曹魏洛陽宮の基礎の上に建築、使用されたことが確認されただけでなく、『水経注』などの文献における、旧城壁西側での漢魏時期の「陽渠」水路の存在を裏付けた。このことは、中国古代都城宮城の構造変化を研究する上で、非常に重要な意義を有している。

2012年から2015年まで、北魏宮城の正殿である太極殿の発掘が再度実施された⁷⁾。太極殿遺跡は北魏宮城中部における西路建築の軸線上に位置し、闔閭門遺跡の北、500m余のところにあたる。南は、三号宮門、二号宮門、闔閭門にそれぞれ面しており、位置は極めて明確である。発掘によると、太極殿中心の主殿基壇の東西幅は102mで、南北長は59-61m、残高は約2mである。基壇は黄土の版築で形成され、最上部は既に破損している。南部における、時期的に晚い少量の礎石坑を除いて、

5) 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所聯合考古隊「河南洛陽市漢魏故城発現北魏宮城五号建筑遺址」『考古』2012年第1期。

6) 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化財

機構奈良文化財研究所聯合考古隊「河南洛陽市漢魏故城魏晉時期宮城西牆与河渠遺址」『考古』2013年第5期。

7) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽市漢魏故城發現北魏宮城四号建筑遺址」『考古』2014年第8期。

礎石などの建築遺構は既に失われていた。基壇南側は破壊が著しいが、東西2箇所南北に向かう車道遺構がある。これは、大殿の左、右陸にあたるものである。基壇北側壁面の保存状態は比較的良好であり、壁高は1m余で、壁面は青磚によって葺かれている。また、壁面下には、磚造りの流路が残存している。基壇北側中間における、北向きの突出部分の東西両端にはそれぞれ一つ、東西方向に向かう踏道遺構がある。踏道上には、方形の舗装用石板が残っており、その石面は平らで円滑である。それらには五字花紋が刻まれ、規格性は高い。断ち割りに基づくと、基壇北側の磚敷、流路、車道などの遺構は全て北朝晩期に増築されたものである。太極殿主殿の基壇東、西側には2つのやや小さい版築基壇が発見されたが、これらは記述にある太極東堂と西堂の基壇に違いない。東堂基壇については、全面発掘が行われた⁸⁾。層位と文献を併せると、この太極殿基壇の主体部分は、曹魏時期に創建、北魏時期に再建・使用され、北周時期にも改築されたが未完成のままであった⁹⁾。

上述の調査を通じて、魏晉から北魏に至る宮城中枢部の主要軸線上にある重要な建築については、おおよそ以下のように理解された。すなわち、太極殿正面には、3つの宮城正門がある。太極殿の主殿東、西両側にはそれぞれ、太極東堂、太極西堂が配置されており、三殿が東西に並列している。さらに、太極殿北面には皇帝の寢殿である顕陽殿、皇后の寢殿である宣光殿があり、ここでは三殿が南北に並んでいるのである。

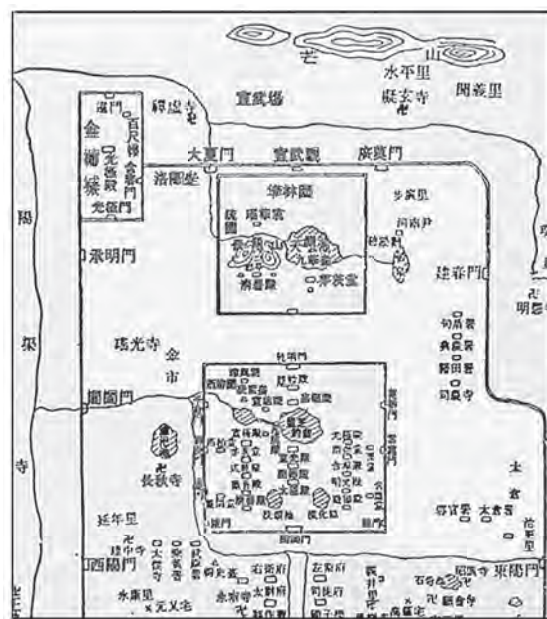


図2 周祖謨『洛陽伽藍記校釈』による北魏洛陽城復元図

三、北魏宮城北における後宮の調査研究

文献の記載によれば、洛陽遷都以降の北魏は、魏晉洛陽城における建築構造の影響を受けている。魏晉時期の宮城形態と主要建築配置を継承したほか、魏晉時期の禁苑である華林園を宮北に再建し、同時に北宮西部（曹魏に建てられた九龍殿、池園一帯）に西遊園（西林園）を造営、魏晉時期の宮苑建築の基本を復興したのである。文献記載（図2）や新たな調査発見を併せると、北魏宮城そして、さらに遡る魏晉宮城北の後宮と禁苑建築について、若干の復元研究を行うことが可能である（図3、図4）。

1、宮城北における陵雲台の位置について

1965年春、孟津県平樂鎮金村において水利施設の建設が行われ、北魏宮城内西北部にあたる、現地では「羊塚」との俗称を持つ版築高台において、磚造りの円形の建築基壇1基が発見された。その構造は非常に独特である。発掘者は遺構の宮中での位置と、建築構造の特徴に基づいて、氷を保存す

8) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽市漢魏故城發現北魏宮城太極東堂遺址」『考古』2015年第10期。

9) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽市漢魏故城太極殿遺址の発掘」『考古』2016年第7期。

る氷室あるいは水井戸と考えた。さらに、基壇上の殿堂では、氷室から上昇する冷気によって暑さが和らげられたとし（図5）、文献に記載された、宮中における避暑宮殿「清暑殿」と関わる可能性が推測された¹⁰⁾。

かつて筆者は、文献と考古資料によって研究をすすめ、文献の清暑殿は宮城北面の後宮内ではなく、宮城北面の華林園内にあったと考えた。そうすると、この氷室を持つ避暑宮殿はまた別の遺構であることになる。そして、これは文献における、曹魏文帝によって創建され、北魏に至るまで使用された名高い避暑高台建築である、「陵雲台」の基礎部であると考えた（図3）¹¹⁾。

『三国志・魏書』等の記載では「黄初二年、これ陵雲台を筑す歳なり。」とある。

『元・河南志』や戴延之『西征記』では、「凌雲台に氷井有り。之を延べて六月に持去れども、日を経て猶堅し。」とあり、『述征記』では「氷井は陵雲台北にあり、古旧の藏氷処なり。」という。

『洛陽伽藍記』には、「千秋門内道北に西游園有り。園内に凌雲台有り、台上に八角井を有す。高祖は井の北にて涼風観を造る。之に登りて遠望せば、目は洛川を極む。」とある。

この円形建築基壇は、西は宮城西壁から約65m、南は宮城を横に貫く「横三道」からは約300m、宮城東西を横切る東西御街（街の宮中に含まれる部分は特に「永巷」と呼ばれる）の北方の、一基の方形宮殿内にある。文献記載を併せて考えると、北魏時期の胡太后が居住していた西游園内にあたるであろう。

発掘資料に基づく、この円形建築の基礎は、25m四方の版築基壇内に建てられており、現地では「羊塚」と呼ばれている。発掘時の版築基壇の残高は2.5mで、四壁は比較的整っている。基壇内には磚造りの円形基礎が残っており、その外径は5.62m、内径は4.9mである。用いられた磚は全て魏晉時期に作られた、比較的整った小型条磚である。遺跡の観察によると、この円形基礎内には、上下両層にわたって、大量の負荷に耐えうる「井」字形の骨組があり、骨組の上には本来、厚い木板が当ててられていた。円形基礎内の地面は、周辺から中間に向かって傾く水切り用磚敷地面や、小円池等の貯水施設によって舗装されており、本建築は、明らかに蔵氷の機能を持つものである。

文献記載によると、「陵雲台」は曹魏文帝の黄初二年に建てられ始め、内部には「氷井」がある。北魏時期にも「陵雲台」は引き続き使用されており、古旧藏氷処と称され、上部に「八角井」や「涼風観」などがあった。発掘された円形建築基礎の位置、構造、建築と使用の年代などは、これらの記述と完全に一致する。円形建築基礎内部の水井戸には、上下両層の井字形骨組が観察でき、下層の方は一定の重量を持つ氷塊を置くためのものである。一方、上層のものは、井戸の開口部に近く、開口

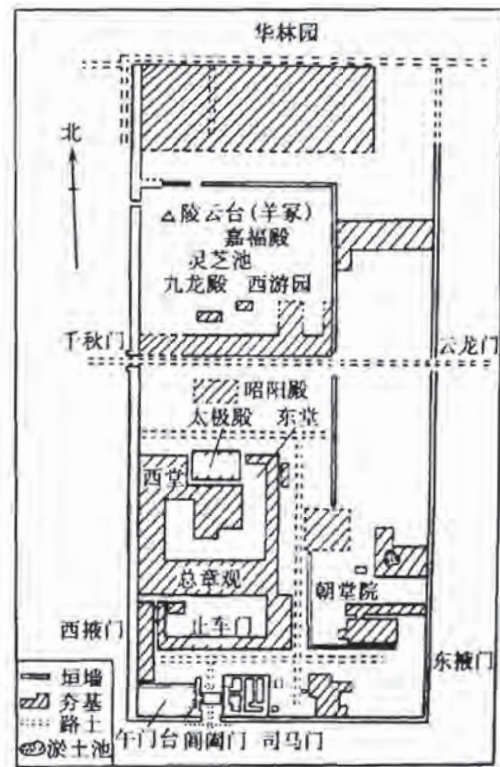


図3 銭国祥 2003 による魏晉～北魏の洛陽宮城復元図

10) 馮承澤、楊鴻勳「洛陽漢魏故城円形建筑遺址初探」『考古』1990年第3期。

11) 銭国祥「漢魏洛陽故城円形建筑遺址殿名考辨」『中原文物』1998年第1期。

部は八角形をなしている。これは、文献に記載された「八角井」と符合するものである。「涼風観」については、名前から想像するに、避暑の高台建築である。この高台建築遺跡は、地下に氷井戸を有し、貯蔵した氷塊によって冷気を蒸散させるといふ、避暑機能に合致したものである。北魏時期における「古旧蔵氷処」等の記載は、この高台の氷井戸施設が魏晉時期に建てられたこととも一致するものである。

文献に記載された陵雲台の蔵氷避暑建築の発見、調査は、漢魏洛陽城の宮城形態をさらに考究していくことが重要な意義を有することを明確にした。また本建築は、特定の位置を持った、重要指標となる建築物として、また、北魏や魏晉宮城北部の宮殿、御苑の建築構造を復元するにあたって極めて重要である。

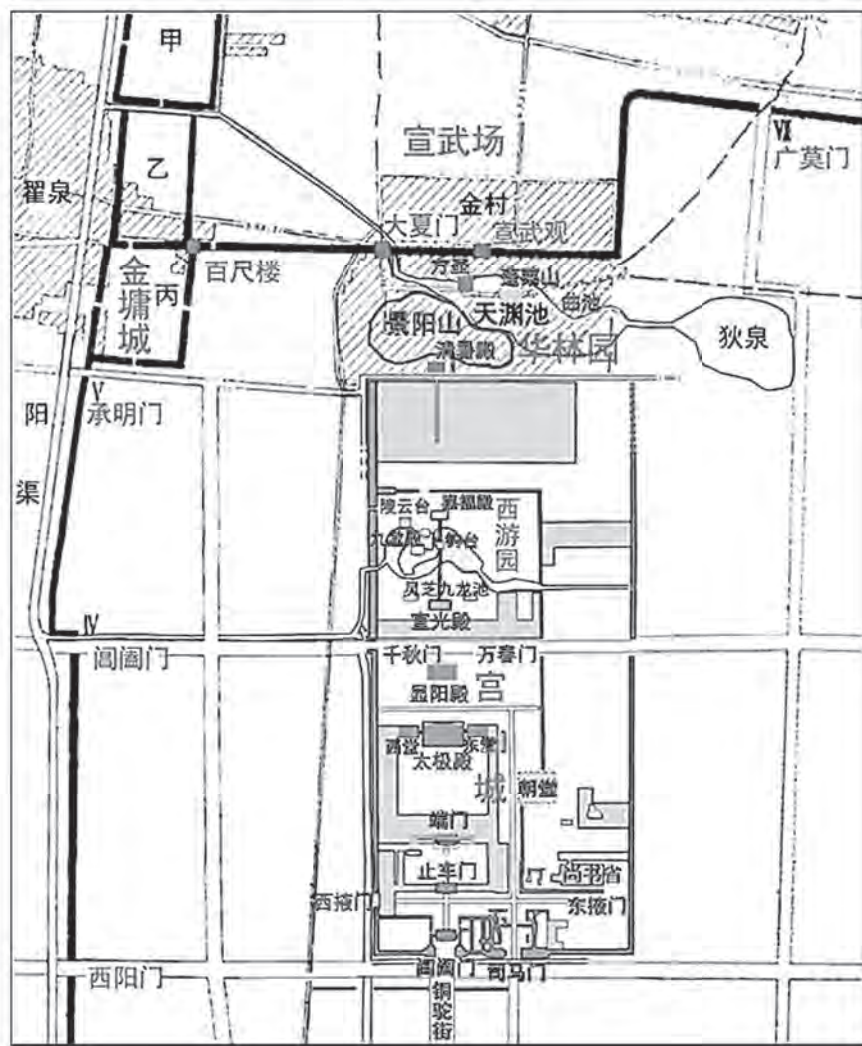


図4 銭国祥による北魏洛陽宮苑の新復元図

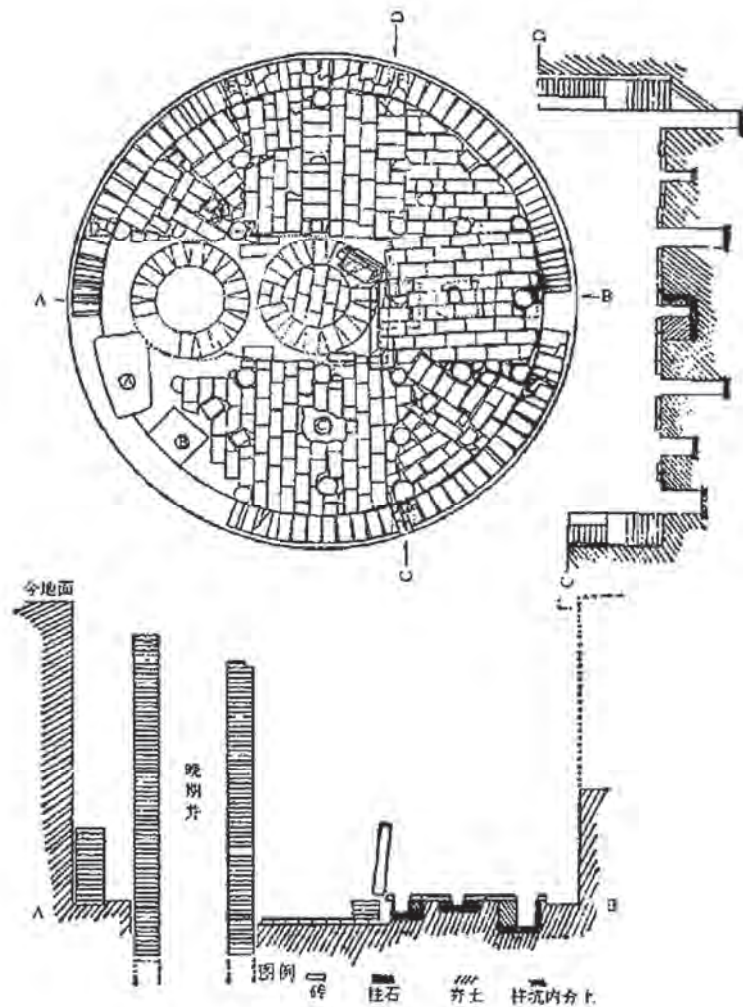


図5 漢魏洛陽城宮城における円形建築遺構平面、断面図

2、後宮西游園、宮殿池苑の復元研究

陵雲台の位置、考古調査に基づく北魏宮城平面図（図3）、さらに文献記載によって、北魏宮城西面の正門である千秋門、西游園の位置を凡そ定めることが出来る。

『洛陽伽藍記』の記載では「千秋門内道北、西游園有り。園内、凌雲台有り。」という。『元・河南志・魏城闕古迹』では、「千秋門、宮西門、西は闔閭門に對す。（本文注：大城西壁、南は第三門より起す。）」とある。図面では、北魏宮城北半分には、完全な方形宮殿が1基あり、それは宮城西壁の中間にある門址の北側に位置する。この宮門は、西は調査で確定された北魏内城西壁の闔閭門に向っている。これは明らかに、宮城西壁の正門である千秋門である。門址内側の方形宮殿については「西游園」であることは疑いない（図4）。

この宮殿内には陵雲台を除くと、文献には以下のような記載がある。「台下に碧海曲池有り。台東に宜慈觀有り、地を去ること十丈なり。觀東に靈芝釣台有り。木を累してこれを為し、海中に出づ。地を去ること二十丈なり。刻石は鯨魚を為し、背に釣台を負う。地面より涌出するが如く、又、空中飛下するに似たり。釣台南に宣光殿有り、北は九龍殿有り。殿前の九龍は吐水し、一海と成す。凡そ

四殿あり、みな飛閣有りて靈芝に向かい往來す。三伏の月、皇帝靈芝台に在りて以て避暑す。」『水經注・谷水』には、「渠水また東のかた故金市の南を歴て、千秋門右宮門に直る。また支流は石逗に入り伏流して靈芝の九龍池に注ぐ」とある。これらの文献には、西游園内の多数の宮殿樓閣、池水園林景觀が記載されている。その中で重要な宮殿建築には、宣光殿、嘉福殿、九龍殿、宣慈觀、靈芝釣台、陵雲台等があり、大型水池には、碧海曲池、靈芝九龍池等がある。

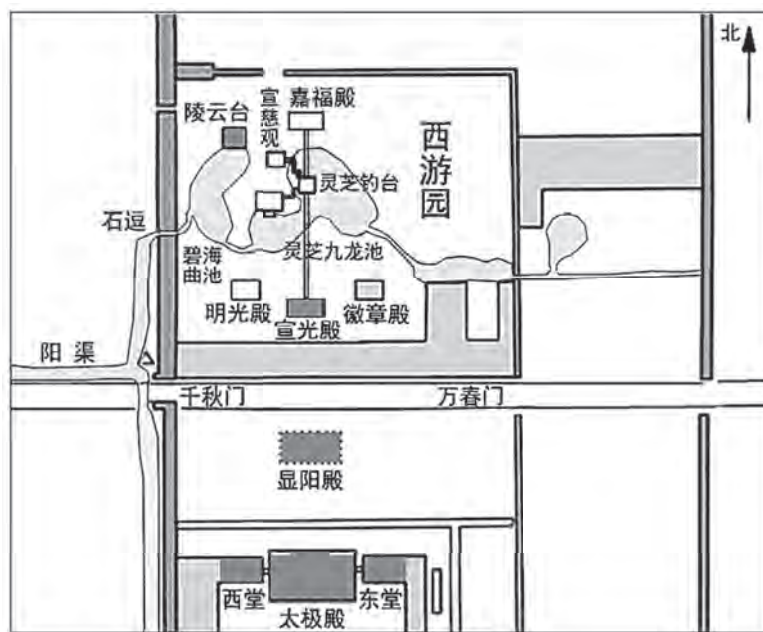


図6 銭国祥による北魏洛陽宮城西游園の復元図

る。宮城内に水を引く水路や、宮壁の石逗などの位置も凡そ決めることが出来る。

西游園（西林園とも称す）は宮城北部の後宮内における、風景秀麗な宮殿御苑建築区である。当時の皇帝および后宮の女性達が、避暑あるいは遊興のため、臨幸あるいは居住した所である。文献記載では、北魏孝明帝の母である胡太后がここに居住し、孝明帝を生んだとされる。『魏書・肅宗紀』には「永平三年…、帝は宣光殿の東北に生ず。光有て庭中を照らす。」孝明帝が位について後、胡太后は孝明帝が後宮で母后に拝謁する機会を捉え、皇帝を引きとめて泊ませた。それによって、孝明帝親政後、母子間にあった隔たりが改善されたのである。『魏書・奚康生伝』では「靈太后、時に嘉福に在り。未だ前殿に御せず。」「正光五年秋、靈太后自ら下瓮せんと欲す。肅宗乃ち嘉福殿に宿す。積もること数日、遂に太后と密謀し叉を図る（本文注：叉は即ち元叉なり）。」「魏書・胡国珍伝』には、「神龜元年四月、太后宮に還りて、九龍殿にて成服す。遂に九龍寢室に居す。」とある。

以上によって、北魏宮城北部における後宮内の主要宮殿と池苑の位置を凡そ復元出来るのである(図6)。

四、北魏宮城北部における高台建築と離宮、禁苑の調査研究

1、大城北壁における高台建築と離宮金墉城の調査研究

曹魏初期、軍事防御の為、洛陽城北壁上に高台建築である宣武觀、百尺樓、三層の大夏門が建てられた。さらに、大城西北角内には一基の小城である金墉城(図7)が、宮城北面から大城北壁に至る間には、皇家禁苑である芳林園(図4、図9)が造営された。

宣武觀については、魏晉洛陽城北壁中段の大夏門内東側に位置し、城壁の北面(大城北壁外)には兵士の訓練場である宣武場が設置された。これは明らかに、兵士を觀閲するための高台樓觀建築であ

る。宣武観は大夏門の東側にあるので、その南面は皇家禁苑である芳林園になる。園内には大型水池である天淵池がある。従って、『河南志・晋城闕古迹』では、「宣武観。大夏門内東北に在り。故に南は天淵池を望し、北は宣武場を瞻す。」とされている。

さらに大夏門は、文献記載によると、曹魏初期に建造された百尺に達する三階建の門楼である。『水経注』では、「谷水はまた大夏門下を歴す」とあり、陸機『与弟書』では「門は三層を有し、高百尺。魏明帝の造るなり。」とある。さらに、『河南志・魏城闕古迹』では、「三層楼。陸機『与弟書』に曰く、『大夏門は魏明帝の造るなり。三層楼を有し、高百尺。』」とある。

百尺楼は、文献記載では魏文帝によるものとされ、洛陽城の西北隅、金墉城東北角にあるものとされている。『河南志・魏城闕古迹』では「百尺楼。『洛陽記』に曰く、『洛陽城内西北隅、百尺楼有り。文帝の造るなり。』」とあり、『洛陽伽藍記・城内』では、「(金墉)城東北角に魏文帝の百尺楼有り。」とある。さらに、『太平御覧・卷176』では『洛陽地記』を引用し、「金墉城。東北角に楼有り。高百尺、魏文帝の造るなり。」『太平御覧・卷179』では華延雋の『洛中記』を引いて、「金墉城東北に百尺楼有り。魏都水使者陳熙の造るなり。」とある。



図7 銭国祥による北魏洛陽宮城北部の高台建築復元図

金墉城は文献によれば、魏の明帝が建てたものであり、洛陽城内の西北角或は西北隅にあった。『太平御覧・卷

176』では『洛陽地記』を引き、「洛陽城内西北角に金墉城に有り。」『水経注・谷水』では「谷水はまだ金墉城北を東に経る。魏明帝は洛陽城西北角に之を筑し、金墉城と謂う。」『讀史方輿紀要・金墉城条』には「金墉城、故洛陽城西北隅なり、魏明帝の筑すなり。」とある。

漢魏洛陽城西北角の考古調査で発見された甲、乙、丙の三小城について、従来ではこれらが魏晉時期の金墉城で、曹魏鄴城における西北角の「三台」を模したものと考えられたことがあった。しかしながら、新たな資料と文献記載を併せると、これは否定され、曹魏に建て始められた金墉城が魏晉洛陽大城の西北角内、つまり従来の丙城(図八)にあったことが確定されたのである¹²⁾。甲城と乙城は均しく北魏時期以後建築されたものである。これらは、隋末に李密と王世充が征服した際、三十万人をして建築した金墉城である可能性が高い。すなわち、魏晉から北魏時期の金墉城とは無関係なのである¹³⁾。

12) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「漢魏洛陽故城金墉城址発掘簡報」『考古』1999年第3期。

13) 銭国祥「漢魏洛陽城金墉城形制布局研究」『新世紀の中国

考古学——王仲殊先生八十華誕紀念論文集』科学出版社、2005年。

記載によれば、金墉城には南門、東門、北門があった。『水経注・谷水』では「金墉城。南を乾光門と曰い、夾みて両観を建て、観の下に朱桁を塹に列し、以て御路と為す。東は含春門と曰う。北に退門有り。」とある。これらの幾つかの門址と、調査された丙城四面壁の開口部は符合するが、甲城、乙城の開口部とは合わない。

金墉城は一つの単独の小城であり、都城で地勢の最も高い西北角に位置し、明らかに重要な機能を有している。当時の帝王の理想的な離宮で、軍事的に極めて重要な要地であったのである。曹魏および北魏初年では新宮が未完成であり、この城都が帝王の臨時的宮苑となった。魏晉時期には「西宮」とも称されたが、曹魏後期から西晉時期には、廢帝、廢后、廢太子を捕囚する場所となっていた。北魏が洛陽に遷都した当初、孝文帝がここに住み、金墉城から遠くない西壁外の王南寺にて読経礼拝するため、西壁最北に専用の承明門を設けた。これによって城門の数は13に達した。こののち、金墉城は先代の諸帝夫人が居住する離宮となった。

魏文帝は大城西北角に百尺楼を建造した。それは調査によると、丙城東北角に位置した、当地で「阿斗坟」と呼ばれる版築基壇跡である。それは大城では西北角にあたり、金墉城東北角の壁にある。考察の結果、その建造年代と金墉城は同じく曹魏初期であるが、金墉城よりも早い。このことは、文帝が先に百尺楼を造り、明帝の後、金墉城が建造されたという時代順序に合致している。

魏晉から北魏にいたる金墉城の位置が確定されたことで、関連文献の記載の正しさは一層証明された。さらに、金墉城の創建範囲と沿革が明らかになり、漢魏洛陽城の構造について新たな認識が提供されたのである。

2、宮城北側における禁苑華林園の復元研究

曹魏初期、宮城北側において、重要な皇家苑囿である芳林園（後に「華林園」と改称）が建てられた。芳林園は魏文帝黃初元年に創建。園内には天淵池、景陽山が築かれており、山は池を掘削した土を盛ったものである（図9）。

魏明帝景初元年にも、芳林園の大規模工事が行われた。各地から名石が採取され、景陽山が築かれた。皇帝は自ら臣下を率いて土を掘り起こし、建造に力を尽くした。魏帝曹芳の時期に、諱を避けるため「芳林園」、さらに後に「華林園」と改称された。以後、「華林園」は西晉と北魏においても継続して建造、使用されたのみならず、魏晉南北朝時期の各城都のなかで、皇家苑囿の通称ともなったのである。

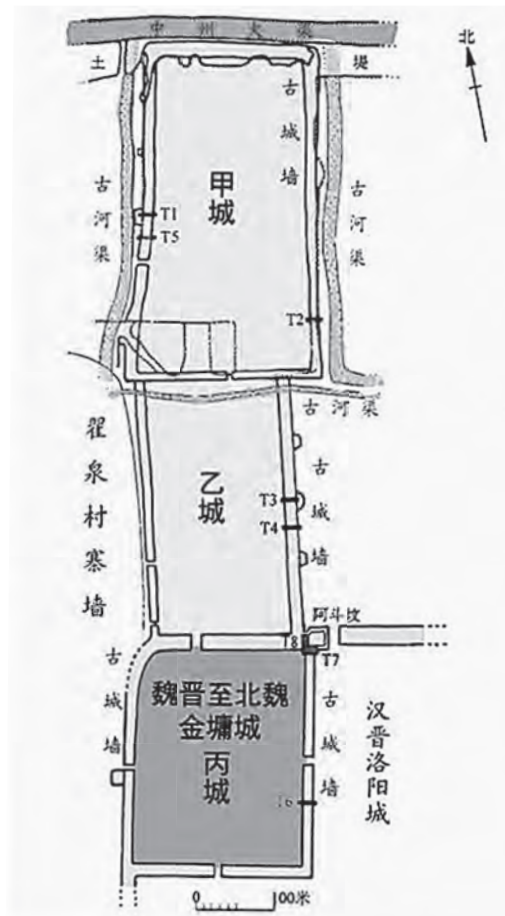


図8 漢魏洛陽城における金墉城調査平面図

魏晉の華林園で主要な山水景観は景陽山と天淵池である。園内には他に、「崇光、華光、疏圃、華延、九華の五殿」と「繁昌、建康、顯昌、延祚、寿安、千祿の六館」があった。さらに、「百果園においては、果樹種毎に一林が造られ、各林には一堂があった。桃間堂、杏間堂というたぐいである。……そして、園内には方壺、蓬萊山、曲池も存在した。」といわれる。

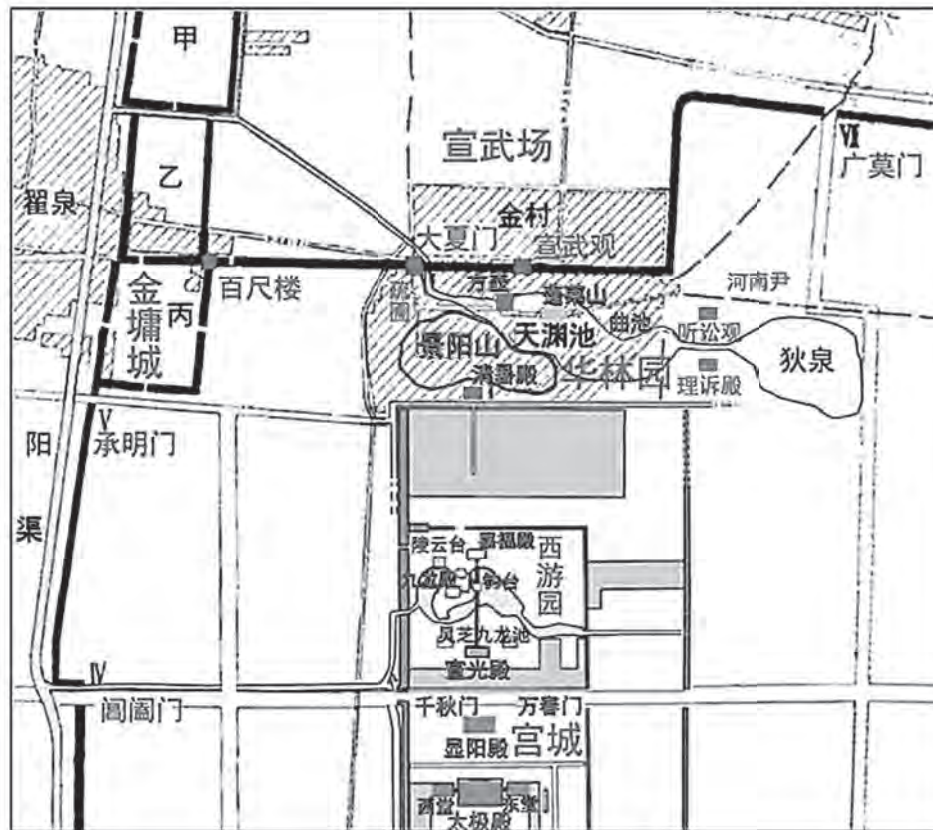


図9 銭国祥による北魏宮城北部の華林園復元図

魏晉時期の華林園には、両漢時期の皇家禁苑にあった游漢、騎射、圍獵、園圃などの機能があったが、園内の主要活動は、政治的機能に転化した。例えば、帝王が訴訟を聞き、臣下を延見し、儒臣の進講を聞き、射礼を行い、臣下を饗宴することなどは全てここで執り行われたのである。記載に依れば、魏明帝が天淵池南において流杯用の石溝を設け、群臣をもてなしたという。

北魏時期にも曹魏時期の華林園の造営が引き続き行われ、山や池を主要な景観とし、景陽山、蒼龍海（大池あるいは漢代天淵池とも呼ばれる）が造られた。北魏宣武帝の時期には池内に蓬萊山、山上に仙人館が造営された。池の西南における景陽山上には景山殿、山東には義和嶺、その嶺上には温風室が備えられた。さらに山西には常娥峰と、その峰上の露寒館があり、飛閣で相通じ、山を凌いで谷を跨ぐ。

北魏時期の華林園内の主要景観は、依然として晋魏時期の景陽山、天淵池という構造を破ることなく、明らかに魏晉代の容貌に倣ったものである。このことは、正統王朝における政治的需要的継承を表明するものである。

汉魏洛阳城宫城的考察新发现与布局研究

钱 国 祥

一、汉魏洛阳城址的历史与考察概况

汉魏洛阳城是中国古代重要的都城遗址之一，位于今河南省洛阳市区以东 15 公里的伊洛河盆地中部偏北的位置。根据文献记载与考古勘察，汉魏洛阳城遗址始建于西周，东周、东汉、曹魏、西晋和北魏先后作为王都或国都，其累计都城时间长达 600 年，在中国 4000 年文明史中几乎占七分之一的的时间，在中国古代都城中的地位无可替代。城址自周代始建，一直沿用到唐初，共使用了约 1600 年。其城址范围最大时是北魏时期，面积近 100 平方公里。

该城 1961 年被公布为第一批全国重点文物保护单位。1962 年中国社会科学院考古研究所即开始派队考察发掘，至今已经考察了 50 多年，取得了许多重要的考古发现。

其中 2000 年以前，主要有三个阶段的考察工作。第一阶段：20 世纪 60 年代，对北魏时期的内城（即汉晋时期大城）全面勘探，个别遗址进行重点发掘，以了解该城基本布局和内涵。第二阶段：20 世纪 70-80 年代初期，先后发掘了汉晋时期大城南郊的灵台、明堂、辟雍和太学等礼制建筑遗址和北魏内城内的永宁寺院塔基遗址。第三阶段：20 世纪 80 中期-90 年代，主要是对北魏时期的内城墙垣、外郭城墙垣与道路和水系、金墉城墙垣等进行勘察发掘。

进入 21 世纪以后，开始启动对北魏宫城的大规模勘察发掘。

二、北魏宫城南部中枢区的新发现

对汉魏洛阳城宫城遗址的最早认识，始于 20 世纪 60 年代初期，当时勘探发现了这座位于北魏内城北中部的宫城遗址，其规模宏大，对其大致范围和基本格局有了认识，初步认定是北魏宫城遗址¹。勘察的北魏宫城南北长 1398 米，东西宽 660 米，中部被一条东西御道横穿，南部为朝殿区，北部为寝殿区，宫城的北面为皇家禁苑华林园。

1984 年，在宫城中心殿址的四面试掘探沟，对其保存状况和规模有所了解，初步确定是北魏宫城的正殿太极殿遗址。

1998 年至 1999 年，又在北魏宫城的东、西、南三面墙垣上试掘探沟 14 条，获得了宫墙建筑结构和建筑时代及沿用的相关线索。尤其重要是在宫城南墙西段内侧，发现一座保存尚好的城门遗址，之后的大规模发掘确认为北魏宫城正门阊阖门遗址²。

1 中国科学院考古研究所洛阳工作队：《汉魏洛阳城初步勘查》，《考古》1973 年 4 期。

2 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《河南洛阳汉魏故城北魏宫城阊阖门遗址》，《考古》2003 年 7 期。

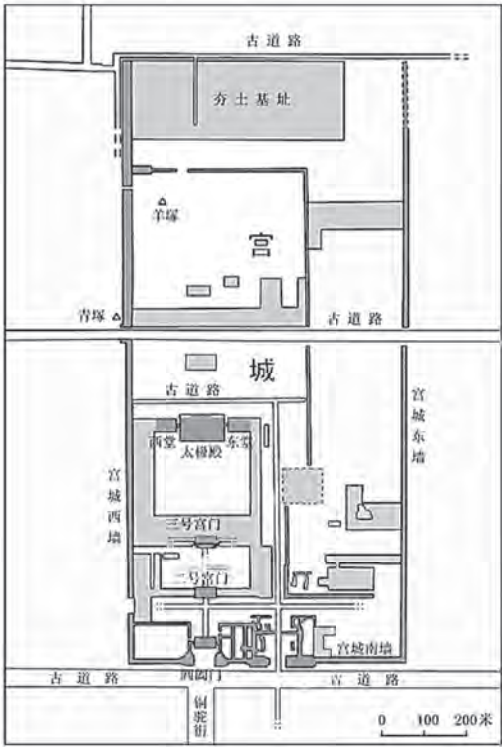
2001年至2003年对宫城阊阖门遗址的发掘显示，门址由城门楼基座、门楼两侧院落、门楼前左右双阙以及与双阙连接的两侧宫墙等组成。城门楼台基东西44.5米，南北24.4米，前后各有3个慢道或踏道。台基上残存40个柱础（坑）组成的城门楼柱网，还有两侧2个墩台和中间2个隔间墙及之间3个门道遗迹。门前左右双阙规模巨大，且对称分布，间隔41.5米，单个阙台29米见方，阙体平面皆为1个母阙带2个子阙的曲尺形子母阙式。通过对门址解剖，明确该门址主体部分为魏晋时期始建，北魏时期重修沿用，北周时期仍有改建。这一发现，对于确定该城魏晋时期的宫城形制极为重要。2007年，又对宫城阊阖门前的铜驼街遗址进行了勘察发掘。

2008年至2011年，中国社会科学院考古所与日本奈良国立文化财研究所合作，开始对北魏宫城中枢南区进行发掘。

2008年首先对北魏宫城正面阊阖门北侧的第二道宫门，推测可能是止车门的遗址进行发掘³。该门址位于阊阖门正北面95米处，门前有东西向的横街。通过发掘，确认该门址除不设双阙外，形制结构和规模尺度均与宫城阊阖门遗址基本一致，也是一座三门道的殿堂式宫门建筑。门址台基东西长约44.5米，南北宽约24米，方向约4度。台基上也有两个墩台、两个隔间墙及三个门道，台基南、北侧各有三个慢道，台基东、西两端各接附属的廊房建筑。根据解剖，该门址也始建于魏晋时期，北魏时期重修沿用，北朝晚期略有改造。

2009年至2010年，又对北魏宫城正面的第三道宫门进行全面发掘⁴。该门址位于二号宫门正北80米，太极殿正南300米处，是太极殿正前方的最后一道屏障建筑，根据记载可能是宫城的端门遗址。据勘察，三号宫门时代较为复杂，魏晋至北魏时期的门址遗迹仅存南半部，且被晚期柱网扰乱；北半部被北朝晚期的大型夯土基址破坏，根据地层叠压关系和文献记载，该夯土应为被北周时期重修洛阳宫所为，但夯筑似乎未完工。据残存遗迹复原，魏晋至北魏时期门址的规模和形制结构，与阊阖门和二号宫门遗址相似，也是一座三门道的殿堂式宫门建筑。该门址台基两侧均连接有大型廊房的夯土基址，廊房基址的北半部也被北朝晚期夯土破坏。据对门址解剖，三号宫门及两侧的廊房建筑始建时代也不晚于魏晋时期，北魏时期重修沿用。

2010年至2011年，中日合作又对北魏宫城西南隅编号为五号建筑遗址进行了发掘⁵。发掘的西南隅遗址西距宫城正门阊阖门140米，西墙基址残宽2.2—4米；南墙基址残宽4—5.8米。通过发掘解剖，一方面确定了魏晋至北魏宫城西南角的确切位置；另一方面对宫城西南角的建筑规模和形制结构均有了了解。其西南角基址平面均向外侧和内侧凸出，地下夯土基础最厚达3—3.5米，规模结构较一般墙垣加



图一 汉魏洛阳城北魏宫城太极殿勘察平面图

3 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化财机构奈良文化财研究所联合考古队：《河南洛阳市汉魏故城新发现北魏宫城二号建筑遗址》，《考古》2009年第5期。

4 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化财机构奈良文化财研究所联合考古队：《河南洛阳市汉魏故城发现北魏宫城三号建筑遗址》，《考古》2010年第6期。

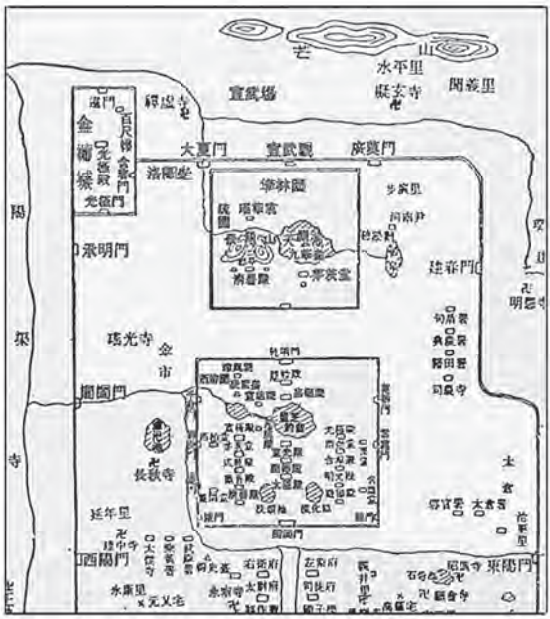
5 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化财机构奈良文化财研究所联合考古队：《河南洛阳市汉魏故城发现北魏宫城五号建筑遗址》，《考古》2012年第1期。

强和增宽，显然具有角楼一类的高台建筑。在宫城西南角内侧，还发现一些北朝时期的给排水和生活设施，有大型砖砌水池、数条砖砌水渠和数座大型炉灶等遗迹，结合阊阖门两侧院落内发现有数量较多的铠甲、兵器等现象，推测这一区域应与禁卫军的营地有关。

这一年度内，还对宫城西南角的宫城西墙进行了解剖⁶。发掘探沟南距宫城西南角80米，东西长70米，南北宽4米，贯穿宫城西墙内外。发掘显示，北魏宫城西墙东西宽5.8—7.4米，残厚2.7—5.1米，修筑在汉晋河渠的废弃堆积之上。北魏宫墙之上，还残存有北周时期重修的宫城西墙。更重要的发现，是在北魏宫墙内侧还发现了不晚于魏晋时期的宫城西墙，其夯土有两块，总宽约8米，厚3.6米，墙外有包砖及沟槽痕迹。同时在魏晋宫墙外侧，还发现一条汉晋时期的大型河渠遗迹，其河渠自北向南流水，东边缘距魏晋宫墙外侧的包砖沟槽4.2米。在北魏和北周宫墙外侧，还分别有北魏和北周时期的路面遗迹，路土东西宽11—15米。北魏路面下汉晋河渠的废弃堆积与淤土中，还发现一条北魏时期的大型砖砌暗渠。魏晋宫墙和外侧汉晋时期大型河渠遗迹的发现，不仅确认了北魏宫城是在曹魏洛阳宫基础上修筑沿用，还印证了《水经注》等文献记载的宫墙西侧汉魏时期的“阳渠”水系，这对于研究中国古代都城宫城形制的演进具有非常重要的意义。

2012年至2015年，又实施了对北魏宫城正殿——太极殿遗址的发掘⁷。太极殿遗址位于北魏宫城中部的西路建筑轴线上，阊阖门遗址正北500余米处。其南面分别正对三号宫门、二号宫门和阊阖门三道宫门，位置极为显赫。发掘显示，太极殿中心主殿台基东西102米，南北59—61米，残高约2米。台基由黄土夯筑而成，顶部已残损，除南部有晚期的少量承础石坑外，柱础等建筑遗迹已无存。台基南侧被破坏较为严重，残存有东、西2个南北向的慢道遗迹，即大殿的左、右陛。台基北侧壁面保存较好，壁高1米余，壁表以青砖包砌，壁根犹存砖铺散水。台基北侧中间向北凸出部分的东、西两端，各有一个东西向踏道遗迹，踏道上残存有方形铺地石板，石面平整光滑，刻有五字花纹，规格较高。据解剖，台基北侧包砖、散水和慢道等遗迹均为北朝晚期增修形成。在太极殿主殿台基东、西两侧，还发现2座略小的夯土殿基，应是记载的太极东堂和西堂基址，对东堂台基也进行了全面发掘⁸。通过对遗址解剖并结合文献记载，该太极殿基址主体部分均为曹魏时期创建，北魏时期重修沿用，北周时期改建未成⁹。

通过上述勘察，对魏晋至北魏宫城中枢区主要轴线上的重要建筑有了大致了解（图一）。其宫城主殿太极殿位于宫城中部；太极殿正前方有三道宫城正门；太极殿主殿东、西两侧各有一座配殿即太极东堂和西堂，三殿东西并列；根据记载，太极殿北面还有皇帝寝殿显阳殿和皇后寝殿宣光殿，三座主殿南北纵列。



图二 周祖谟《洛阳伽蓝记校释》复原的北魏洛阳城图

6 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化财机构奈良文化财研究所联合考古队：《河南洛阳市汉魏故城魏晋时期宫城西墙与河渠遗迹》，《考古》2013年第5期。

7 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《河南洛阳市汉魏故城发现北魏宫城四号建筑遗址》，《考古》2014年第8期。

8 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《河南洛阳市汉魏故城发现北魏宫城太极东堂遗址》，《考古》2015年第10期。

9 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《河南洛阳市汉魏故城太极殿遗址的发掘》，《考古》2016年第7期。

三、北魏宫城北部后宫的考察研究

据文献记载，北魏迁都洛阳以后，受魏晋洛阳城原有建筑格局的影响，除了延续魏晋时期的宫城形制和主要建筑布局外，在宫北重新营建了魏晋时期的禁苑华林园，同时在北宫的西部（曹魏营建的九龙殿及池园一带）营建了西游园（西林园），魏晋时期的宫苑建筑基本得到了恢复。结合文献记载（图二）和新的考察发现，我们也可以对北魏宫城或更早的魏晋宫城北部的后宫和禁苑建筑做一些复原研究（图三、图四）。

1、宫城北部陵云台位置的考证定位

1965年春，孟津县平乐镇金村兴修水利设施，在北魏宫城内西北部当地俗称“羊冢”的夯土高台内，发现了一座砖砌圆形建筑基址，建筑结构极为独特。发掘者根据该基址在宫中的位置和建筑结构特征，认为是一座藏冰的冰室或冰井、并向上散发冷气的避暑降温殿堂基址（图五），初步推测，可能与文献记载的宫中避暑殿址“清暑殿”有关¹⁰。

笔者曾借助文献和考古资料做了进一步研究，认为记载的清暑殿不在宫城北面的后宫中，而是在宫城北面的华林园内，这座藏冰的避暑殿基应另有所属，其应该是文献记载中赫赫有名的由曹魏文帝始建并沿用到北魏的避暑高台建筑“陵云台”的基址（图三）¹¹。

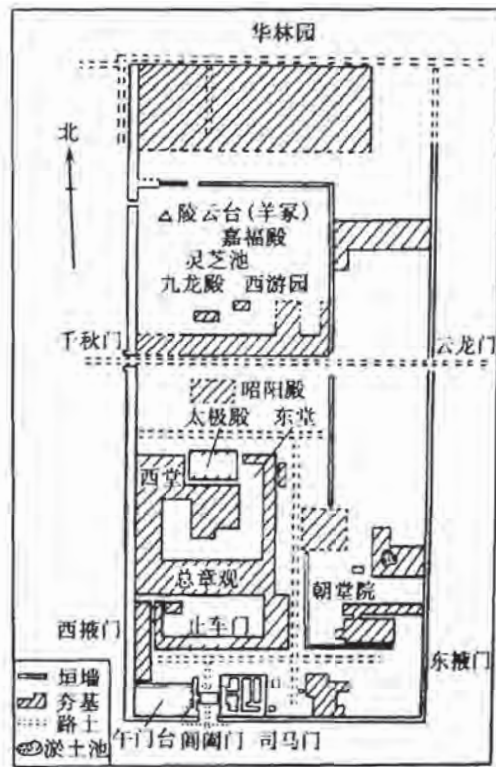
如《三国志·魏书》等记载：“黄初二年，是岁筑陵云台。”

《元·河南志》：“戴延之《西征记》曰：‘凌云台有冰井。延之以六月持去，经日犹坚。’《述征记》：‘冰井在陵云台北，古旧藏冰处。’”

《洛阳伽蓝记》：“千秋门内道北有西游园。园内有凌云台。台上有八角井，高祖于井北造凉观，登之远望，目极洛川。”

而该圆形建筑基址的位置，西距宫城西墙约65米，南距横穿宫城的“横三道”约300米，正处在横穿宫城东西门的東西御街（宫中部分称“永巷”）北面的一座完整方形宫院内，结合记载可能就是北魏时期胡太后居住的西游园内。

据发掘资料，该圆形建筑基址修筑在一座25米见方夯土台内，当地称为“羊冢”。发掘时夯土台残高2.5米，四壁较为规整。台内残存有砖砌的圆形基址，外径5.62米，内径4.9米。所用砌砖皆为魏晋时期制作较为规整的小型条砖。由遗迹观察，该圆形基址内构架有上下两层能负荷很大重量的“井”字形梁架，梁架上原当铺有较厚的板枋。圆形基址内的地面则铺装着由周边向中间倾斜泛水的砌砖地面和小圆池等积存水设施，显然是具有储藏冰块的作用。



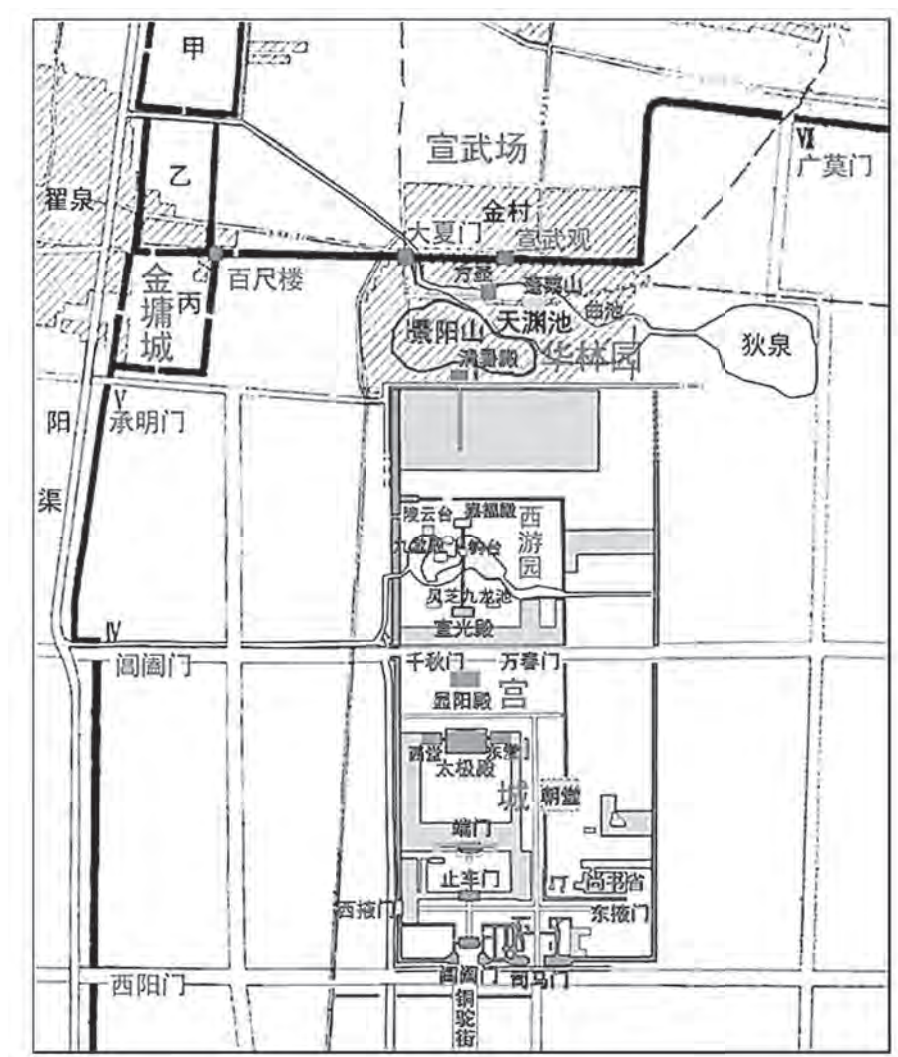
图三 钱国祥 2003 年绘制魏晋至北魏洛阳宫城复原图

10 冯承泽、杨鸿勋：《洛阳汉魏故城圆形建筑遗址初探》，《考古》1990年第3期。

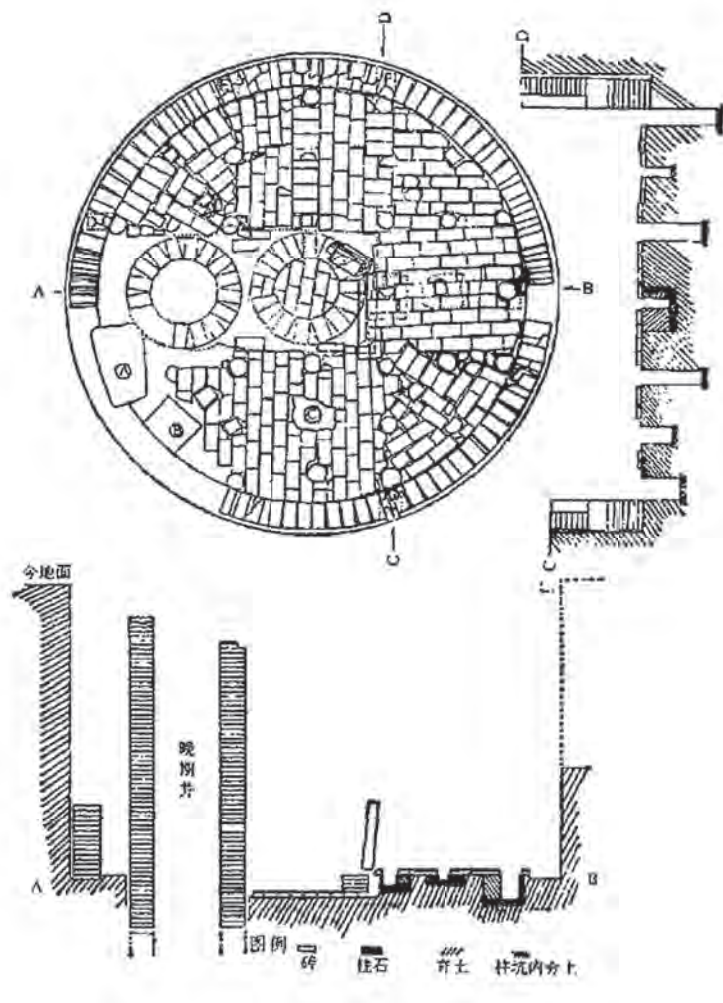
11 钱国祥：《汉魏洛阳故城圆形建筑遗址殿名考辨》，《中原文物》1998年第1期。

按照记载，“陵云台”始建于曹魏文帝黄初二年，内有“冰井”。北魏时仍然沿用“陵云台”，并称之古旧藏冰处，上有“八角井”和“凉风观”等。圆形建筑基址的位置、建筑结构、始建与沿用时代等相关遗迹，与上述记载完全相符。从圆形建筑基址内（冰井）残存有上、下两层井字梁架观察，下层梁架显然是为了放置一定重量的冰块；而上层梁架靠近井口，其“井”字形结构的梁架，井口极有可能就制作成八角形，和记载的“八角井”相符。至于“凉风观”，顾名思义就是一座避暑的台观建筑，该高台基址具有地下冰井并利用储藏的冰块向上散发冷气，显然更符合避暑的功能。而北魏时所称的“古旧藏冰处”等记载，则与该高台冰井设施始建于魏晋时期也相符合。

文献记载的陵云台藏冰避暑建筑的发现和考证确定，对汉魏洛阳城宫城形制的进一步考察具有重要的意义。其作为一个确定了明确位置的重要标志性建筑，对于我们复原北魏甚至魏晋宫城北部的宫苑建筑布局极为重要。



图四 钱国祥新绘制北魏洛阳宫苑复原图



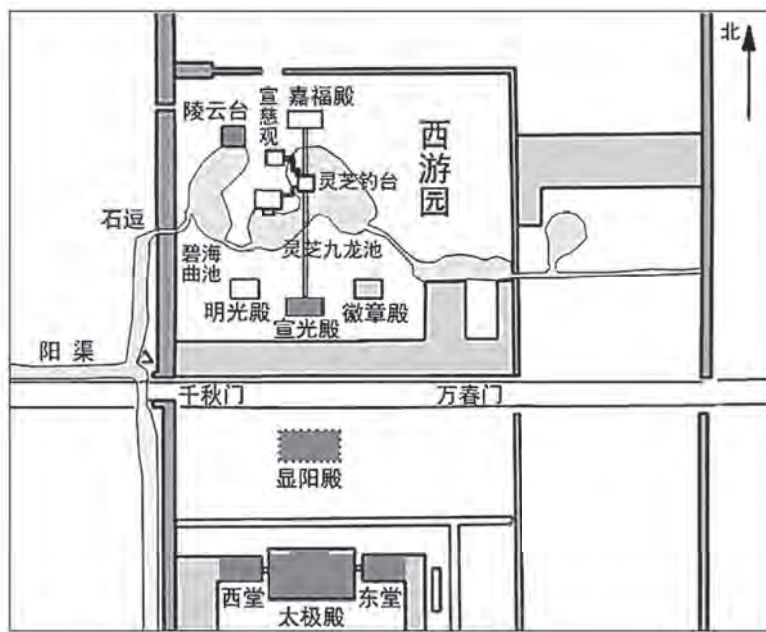
图五 汉魏洛阳城宫城圆形建筑遗址平剖面图

2、后宫西游园及宫殿池苑的复原研究

据此陵云台位置的确定，由考古勘察的北魏宫城平面图（图三），我们根据文献记载资料也可以将北魏宫城西面的正门千秋门和西游园的位置大致定位。

如《洛阳伽蓝记》记载：“千秋门内道北有西游园。园内有凌云台。”《元河南志·魏城阙古迹》记载：“千秋门，宫西门，西对阊阖门（本文注：大城西墙南起第三门）。”在此图上，北魏宫城北半部有一座完整的方形宫院，其位于勘探发现的宫城西墙中间一座门址内的北侧，该宫门向西正对勘察确定的北魏内城西墙阊阖门，显然就是宫城西墙的正门千秋门，而门址内侧的方形宫院也就是“西游园”而无疑了（图四）。

该宫院内除了陵云台，据记载“台下有碧海曲池；台东有宣慈观，去地十丈。观东有灵芝钓台，累木为之，出于海中，去地二十丈。刻石为鲸鱼，背负钓台，既如从地面涌出，又似空中飞下。钓台南有宣光殿，北有嘉福殿，西有九龙殿。殿前九龙吐水成一海。凡四殿，皆有飞阁向灵芝往来。三伏之月，皇帝在灵芝台以避暑”。《水经注·谷水》：“渠水又东历故金市南。直千秋门右宫门也。又枝流入石逗伏流注灵芝九龙池。”这些文献记载记述了西游园内众多的殿台楼观及池水园林景观，其中园中的重要宫殿建筑有宣光殿、嘉福殿、九龙殿、宣慈观、灵芝钓台、陵云台等，大型水池则有碧海曲池、灵芝九龙池等，向宫内引水的水渠及下穿宫墙的石逗等位置也可大致定位。



图六 钱国祥北魏洛阳宫城西游园复原图

西游园（也称西林园）是宫城北部后宫内景色秀丽的宫苑建筑区，是当时皇帝及后宫佳丽避暑或游玩经常临幸或居住之所。记载北魏孝明帝母亲胡太后曾经在此居住并生下了孝明帝，如《魏书·肃宗纪》：“永平三年…，帝生于宣光殿之东北，有光照于庭中。”孝明帝登基后，胡太后也曾借孝明帝到后宫拜谒母后时留宿皇帝，以改善孝明帝亲政后母子之间出现的隔阂，如《魏书·奚康生传》：“正光二年…，肃宗朝灵太后于西林园。日暮，太后欲携肃宗宿宣光殿。”《魏书·江阳王叉传》载：“灵太后时在嘉福，未御前殿。”“正光五年秋，灵太后欲自下发。肃宗乃宿于嘉福殿，积数日，遂与太后密谋图叉（本文注：叉，即元叉）”。《魏书·胡国珍传》记载：“神龟元年四月，太后还宫，成服于九龙殿，遂居九龙寝室”。

据此我们可以将北魏宫城北部后宫内主要宫殿和池苑位置大致复原（图六）。

四、北魏宫城北部的的高台建筑与离宫、禁苑的考察研究

1、大城北墙上高台建筑与离宫金墉城的考察研究

曹魏初期出于军事防御考虑，在洛阳城北墙上建造了高台建筑宣武观、百尺楼和三层楼的大夏门，还在大城西北角内修筑了一座小城——金墉城（图七）。宫城北面至大城北墙之间，则修建了皇家禁苑——芳林园（图四、图九）。

关于宣武观，位于魏晋洛阳城北墙中段大夏门内东侧，在城墙的北面（大城北墙外）设置有士兵操练的宣武场，显然是为了观望检阅士兵而设置的高台楼观建筑。由于宣武观在大夏门东侧，其南面即皇家禁苑芳林园，其园内有大型水池天渊池。故《河南志·晋城阙古迹》记载：“宣武观。在大夏门内东北，故云南望天渊池，北瞻宣武场。”

而大夏门，据记载曹魏初期建造有高达百尺的三层门楼。如《水经注》记载：“谷水又东历大夏门下。陆机《与弟书》云：门有三层，高百尺。魏明帝造。”《河南志·魏城阙古迹》：“三层楼。陆机《与弟书》

曰：大夏门，魏明帝造。有三层楼，高百尺。”

关于百尺楼，记载均称为魏文帝所造，在洛阳城西北隅，也称在金墉城东北角。《河南志·魏城阙古迹》：“百尺楼。《洛阳记》曰：洛阳城内西北隅，有百尺楼，文帝造。”《洛阳伽蓝记·城内》：“（金墉）城东北角有魏文帝百尺楼。”《太平御览·卷176》引《洛阳地记》：“金墉城，东北角有楼，高百尺，魏文帝造也。”《太平御览·卷179》引华延儒《洛中记》：“金墉城东北有百尺楼，魏都水使者陈熙造。”



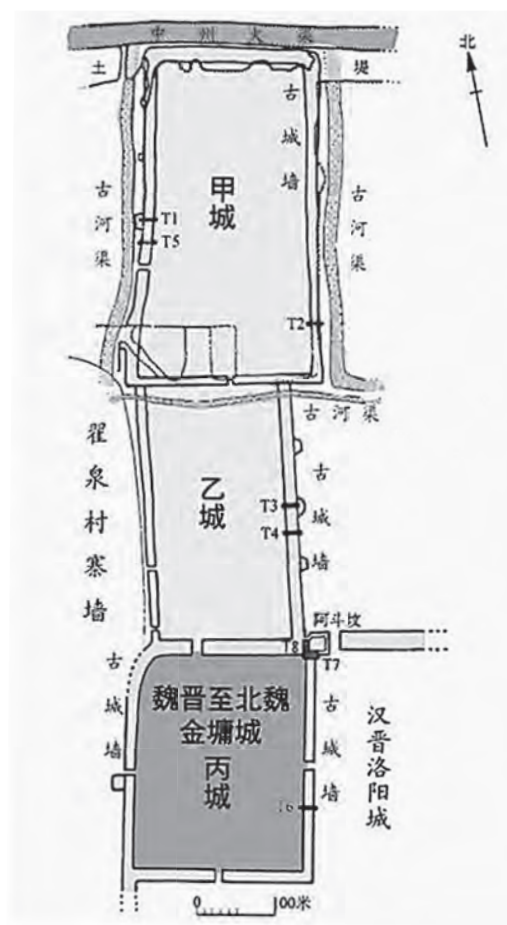
图七 钱国祥北魏洛阳宫城北部高台建筑复原图

而金墉城，则记载皆称为魏明帝所建，在洛阳城内西北角或西北隅。《太平御览·卷176》引《洛阳地记》：“洛阳城内西北角有金墉城。”《水经注·谷水》：“谷水又东径金墉城北。魏明帝于洛阳城西北角筑之，谓之金墉城。”《读史方輿纪要·金墉城条》：“金墉城，故洛阳城西北隅也，魏明帝筑。”

关于汉魏洛阳城西北角考古勘探发现的甲、乙、丙三个小城，以往有学者曾提出可能是魏晋时期的金墉城，并认为其是仿照曹魏邺城西北角的“三台”所建造。而通过新的考察资料并结合文献记载，否定了上述说法，确定了曹魏始建的金墉城位于魏晋洛阳大城西北角内，即以往勘探的丙城（图八）¹²。甲城和乙城均为北魏时期以后建造，很可能是隋末李密与王世充征战时以三十万之众修建的金墉城有关，则与魏晋至北魏时期的金墉城无关¹³。

12 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《汉魏洛阳故城金墉城址发掘简报》，《考古》1999年第3期。

13 钱国祥：《汉魏洛阳城金墉城形制布局研究》，《新世纪的中国考古学——王仲殊先生八十华诞纪念论文集》，科学出版社，2005年。



图八 汉魏洛阳城金墉城勘察平面图

据记载，金墉城有南门、东门、北门。《水经注·谷水》：“金墉城。南曰乾光门，夹建两观，观下列朱桁于堑，以为御路。东曰含春门。北有退门。这几座门址也与勘探的丙城四面墙垣缺口相符合，而与甲城、乙城的缺口无法符合。

金墉城作为一座单独的小城，位于都城地势最为高亢的西北角，显然具有重要的作用。其既是当时帝王非常理想的一处离宫暂住之所，又是位置极为重要军事要地。曹魏和北魏初年，新宫未成，该城都曾作为帝王的临时宫苑。魏晋时期也称为“西宫”，曹魏后期至西晋时期，该城又逐渐变成囚禁废帝、废后、废太子的场所。北魏迁洛之初，孝文帝曾暂住于此，因要到距离金墉城不远的西墙外王南寺讲经礼佛，为此专门在西墙最北端增开一座承明门，使该城城门达到了13座；之后金墉城也成为前代诸帝妃嫔夫人居住的离宫之所。

魏文帝在大城西北角建造百尺楼，其位置与时代也经过考察验证，其就是丙城东北角当地俗称“阿斗坟”的夯土基址。其既在大城西北角，又在金墉城东北角的墙垣上。经考察，其建造时代与金墉城同为曹魏初期，但早于金墉城，符合文帝先造百尺楼、明帝后建金墉城的时代顺序。

魏晋至北魏金墉城位置的确定，进一步印证了有关文献记载，不仅解决了金墉城的始建范围和沿革，

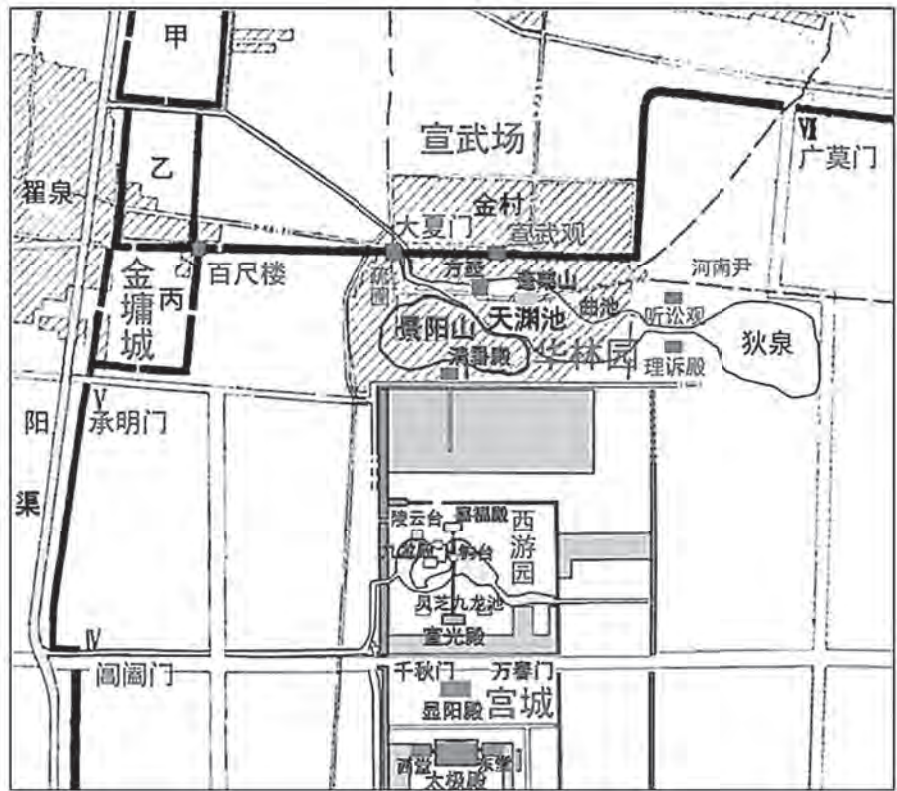
也对汉魏洛阳城城圈形制也有重新的认识。

2、宫城北侧禁苑华林园的复原研究

曹魏初期在宫城北侧，还修建了重要的皇家苑囿——芳林园（后改称“华林园”）。芳林园始建于魏文帝黄初元年，园内挖凿有天渊池、修筑有景阳山，当是挖池取土以筑山（图九）。

魏明帝景初元年，又大规模营建芳林园，采各地名石以筑景阳山。皇帝曾亲率群臣躬身掘土，莫不展力。魏帝曹芳时，为避名讳，先改称“芬林园”，后又改称“华林园”。以后“华林园”不仅为西晋和北魏继续重修与沿用，更成为魏晋南北朝时期各个都城中皇家苑囿的通名。

魏晋华林园中的主要山水景观是景阳山和天渊池，园内还有“崇光、华光、疏圃、华延、九华五殿”和“繁昌、建康、显昌、延祚、寿安、千禄六馆”。“园内更有百果园，果别作一林，林各有一堂，如桃间堂、杏间堂之类。……园内有方壶、蓬莱山、曲池。”



图九 钱国祥北魏宫城北侧华林园复原图

魏晋时期华林园除了具有两汉时期皇家禁苑的游戏、骑射、围猎、园圃等功能外，园中的主要活动向政治功能转化，如帝王听讼、延见臣下、听儒臣进讲、行射礼、宴群臣等皆安排在此。据记载，魏明帝在天渊池南曾设有流杯石沟，以宴群臣。

北魏时期继续修建了曹魏时期的华林园，仍以山、池为主要景观，继续筑造景阳山和苍龙海（或称大池，即汉代天渊池）。北魏宣武帝时又在池内修建蓬莱山，山上建有仙人馆。池西南景阳山上有景山殿，山东有义和岭，岭上有温室；山西有常娥峰，峰上有露寒馆，并飞阁相通，凌山跨谷。

北魏时期华林园中的主要景观，仍然没有摆脱魏晋时景阳山、天渊池的格局，显然是仿制魏晋旧貌，表明其继承正统王朝的政治需要。